



NEDO としての研究への関わり

林 智佳子

どのような仕事がしたいか、自分に向いている職業は何か、キャリアをどのように活かすか、給与や待遇、勤務地 etc.……。就職あるいは転職という岐路は、自分の生き方を見つめ直す良い機会なのかもしれません。就職活動をする中で自分にとっての未知の職場として出会ったのが、NEDO 技術開発機構（以下、NEDO）でした。NEDO に就職するに至った心境をお話するとともに、研究者ではない立場で研究開発に関わる仕事の一つとして、NEDO での仕事を紹介したいと思います。

私は、「人はなぜ病気になるのか」というところに興味がありました。疾患の分子機構を明らかにできる可能性に魅かれたのが研究の入り口に立ったきっかけです。大学4年生で研究室に所属し、教授をはじめとする教員や先輩の大学院生の指導を受けながら研究を開始しました。その後、修士課程、博士課程を経て研究の面白さや醍醐味を少しずつ経験していき、一方で研究を生業とすること、研究に対する思い、研究によって自ら貢献できることなど研究との関わり方を考えるようになりました。

博士課程時代にお世話になった研究所には、「研究が好きだ!」という思いが伝わってくるような魅力ある研究者がたくさんいました。好きな研究に真摯に取り組む姿は本当に尊敬に値するもので、話をしても筋の通った人が多く、自分が興味深く思っていることを誰かに話す時の目の輝きは吸い込まれるほど印象的でした。一方で、仕事の成果、職の安定性、将来設計についてさまざまな悩みや意見を聞くことができました。そして、学生時代にさまざまな先生方と出会えたことで、就職という岐路に重ねて研究への関わり方を考える機会を持つことができました。魅力ある研究者に囲まれながら、研究者ではない形で研究に携わる通を選んだのは、「人はなぜ病気になるのか」という興味を私たちの生活や健康に活かすことができ、さらに「誰に」「何に」対して貢献したのかということを実感できる仕事に挑戦しようと考えたからです。

はじめは研究職を中心に就職活動していたわけですが、インターネットでNEDOのホームページに行き当たりました。私にとっては初めて聞く組織でしたが、基礎研究を産業につなげるためにさまざまな研究開発プロジェクトを推進し、日本の産業競争力の強化を目指す事業をしているようだということがわかりました。また、

環境・エネルギー問題の解決を目指して新エネルギー・省エネルギー導入普及関連の事業も行っているということでした。NEDO との出会いはまったくの偶然でしたが、興味がある分野以外にも幅広く科学技術に携わる機会があることや、新しい形で研究に関わってみようという思いを満たせる組織だと考えて挑戦したところ、縁があってNEDOで仕事をするようになりました。

現在、バイオテクノロジー・医療技術分野の創薬・診断研究開発関連の仕事をしています。経済産業省や総合科学技術会議といった政策当局と連携を図り、国の予算を日本の科学技術研究に投じていきます。具体的には、①大学若手研究者に対する支援、②中長期・ハイリスクのテーマに対する支援、③企業の実用化に対する支援などさまざまな形があります。私が所属する部署は、今の日本そして将来の日本にとって必要な技術開発のうち、上記の②に相当する国が支援すべき技術をナショナルプロジェクトとして推進する仕事を中心となります。

仕事を通じて感じていることは、NEDOは産・学・官と密接な連携が必須な職種であり、これらの要として機能しなければいけないということです。研究の出口・産業へのつながりを正しく捉えるためにも産業界とのコミュニケーションが必要です。また、研究現場にも足を運び研究者と信頼関係を築けるようなコミュニケーションの図り方が重要だと思います。単に研究予算を配るだけの組織ではなく、研究を理解する努力が必要だと考えています。それは、新しいプロジェクトを立ち上げる時に、どのような技術開発が必要なのかをきちんと判断できる力になっていくのではないのでしょうか。さらに、研究開発の現状と未来を政策に反映できるように官とのコミュニケーションも必須です。このようにNEDOでの仕事は多種多様な人との関わりがあり、面白さとやりがいだけでなく自らの成長へとつながる職場です。

私自身、NEDO人として研究に関わりながら人をつないで技術を紡ぐ上で、自らが成長し柔軟に変化できる存在でありたいと思っています。そして、研究者や研究開発とともに、これからまだまだ変化し続ける組織がNEDOです。自らの成長、組織の成長、技術開発の発展を一体として味わうことができる仕事のひとつとして参考にしていただければ幸いです。

<http://www.nedo.go.jp/>